

日本人サッカー選手のメンタリティー

○中野 敬三 (有限会社中野情報技術研究所)

キーワード：サッカー, 心理学, 社会学, 交流分析

1. はじめに

スポーツにおいて選手のメンタリティーが成績に大きな影響を持つことは広く知られている。サッカーは複数の人間で構成されるチームにより勝敗の決せられるスポーツであり、個人競技とは違った社会的な要素を含むスポーツである。

日本人選手は1対1のプレーには弱い、日本チームは強いと評価される理由が十分に解明されているとは言えない状況である。

日本人サッカー選手の決定力不足の原因を探し出し、その解決方法を提示するために、筆者は、第8回日本フットボール学会において『「菊と刀」の視点で見る日本人選手のメンタリティー』と題するポスター発表を行った。

このポスター発表では、交流分析の自我状態と幼児脚本をルース・ベネディクトの生活曲線と組み合わせることによりサッカー選手のメンタリティーの図式を提示したが、交流分析の大人の自我状態の位置づけがなされていない。(中野敬三、2010)

本研究は、このポスター発表を発展させたもので、大人の自我状態をメンタリティーの図式に取り込み、日本人と日本人選手のメンタリティーのフレームワークを提示することを主要な目的とする。また、メンタリティーのフレームワークから導き出される日本人の特徴を分析することを副次的な目的とする。

尚、本研究では交流分析の構造分析と自我状態及び脚本分析の手法を利用するが、交流分析の研究ではないことをあらかじめ明確にしておく。

2. 方法

2.1. 研究方法

本研究は、最初に日本人のメンタリティーのフレームワークを研究して提示し、これに基づいて日本人サッカー選手のメンタリティーのフレームワークを提示する2段階の研究プロセスで構成される。

日本人のメンタリティーのフレームワークを研究するにあたって、比較対照として欧米人、特にアメリカ人を選択した。

2.2. 分析方法

2.2.1 交流分析の自我状態

人間は子供→大人→親の形で成長し、存在するので、人間の自我状態として、子供の自我状態、大人の自我状態、親の自我状態が存在する。

交流分析における自我構造の分析では、子供の自我状態を **Child (C)**、大人の自我状態を **Adult (A)**、親の自我状態を **Parent (P)** とし、更に、**C** と **P** の自我状態を機能分析して、人間の自我状態には下記の5つの状態があるとしている。(杉田峰康・中村和子、1984)

Nurturing Parent (NP)	: 保護的な親
Critical Parent (CP)	: 批判的な親
Adult (A)	: 大人の自我状態
Free Child (FC)	: 自由な子供
Adapted Child (AC)	: 順応する子供

人間の存在形式と交流分析の構造分析及び自我状態の関係を図1に示す。

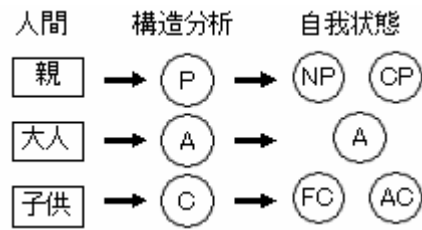


図1. 子供、大人、親の心の分析関係

2.2.2 交流分析の人生脚本分析

交流分析では人間の行動パターン・生き方の癖を人生脚本と捉え、人生脚本分析として研究している。

(杉田峰康・国谷誠朗、1988)

人間の行動は、メンタリティーに支配されるので、メンタリティーの研究には行動パターンの分析が重要であり、人生脚本分析を分析方法として使う。

2.3. 使用するデータ

2.3.1. 行動パターンに関するデータ

アメリカ人と日本人の生き方の違いを分析したルース・ベネディクトの「菊と刀」(長谷川松治訳)を基本データとして使用する。

「菊と刀」では、アメリカ人と日本人の生き方の違いを自由と拘束を指標としてU字型の生活曲線で表わしている。また、育児の特徴として、日本人の子供は自由と我儘が許されて育ち、アメリカ人の子供は厳しいしつけのもとで育てられると分析している。

(ルース・ベネディクト、1967)

生活曲線をU字型曲線で表し、育児法を人形で表し、図式にまとめたものが図2である。

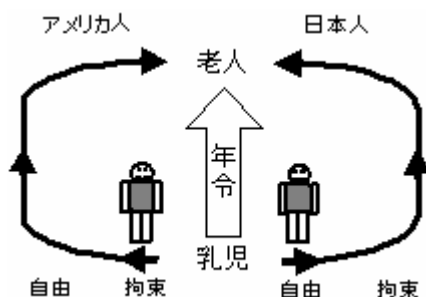


図2. 生活曲線と育児法

2.3.2. 社会に関するデータ

欧米人と日本人の生き方に違いが生ずる原因は、生きる社会が異なるためであり、それを明確にする。

(1) 欧米人の社会と日本人の社会

欧米人が生活する社会は、キリスト教が支配的な権威を持ち、神の戒律が社会規範となってきた。人間が洗礼により神の子となる契約社会である。

日本人が生活する社会は、共同して暮らす村社会であり、村の掟が社会規範となる。

(2) 欧米人の価値観と日本人の価値観

欧米人の社会を特徴づける狩猟生活では、縄張りの大きさが重要であり、強い個人が大きな縄張りを持つことができる。欧米人の価値は、個人の最大化である。

日本の社会を特徴づける農耕生活では、より多くの収穫をあげることが重要であり、新田開発と水の確保に大きな価値がある。新田開発には勤勉努力が求められ、水の確保では分け合いが基本となる。

(3) 日本の民主主義化

ルース・ベネディクトの分析以後の日本社会の大きな変化は、日本社会の民主主義化である。民主主義の定着により、個人の自我意識が高まることになった。

3. 結果

3.1. 日本人のメンタリティー

3.1.1. 人間の自我状態の定義

人間の自我状態は、その人間の生きる場で発現される。生きる場はパーソナルな場としての個人・家族とソーシャルな場としての社会がある。

人間は、それぞれの場で子供、大人、親の自我状態を持つことになる。

パーソナルな場での自我状態は次の3つである。

- Personal Parent (P P) : 親
- Personal Adult (P A) : 大人

Personal Child (PC) : 子供

ソーシャルな場での自我状態は次の3つである。

Social Parent (SP) : 親

Social Adult (SA) : 大人

Social Child (SC) : 子供

3.1.2. 欧米人と日本人の自我状態

欧米人のパーソナルな場は個人であり、ソーシャルな場は契約社会である。

日本人のパーソナルな場は、戦前から家族に加え、民主主義により個人もパーソナルな場となった。ソーシャルな場は、人間の集合である共同社会である。

欧米人と日本人の自我状態は図3になる。



図3. 欧米人と日本人の自我状態

3.1.3. 欧米人の生き方のフレームワーク

欧米人の生き方のフレームワークを人生脚本(人形)の遷移として表すと図4になる。子供時代にSCとしてキリスト教の戒律を社会規範として身につける。その後、PC→PA→PPとして個人主義的な生き方をするが、キリスト教的社会規範に基づいた個人主義といえるもので、我儘な自由行動ではない。

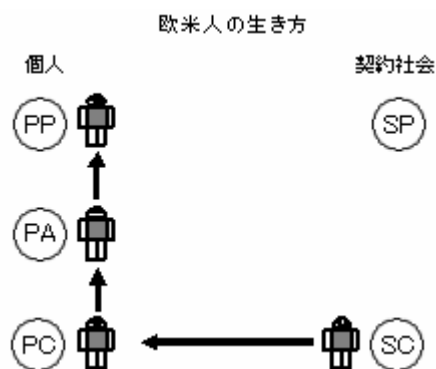


図4. 欧米人の生き方のフレームワーク

3.1.4. 日本人の生き方のフレームワーク

日本は戦後に民主主義社会となり、個人の自我状態が意識されるようになった。この結果、日本人は、大人の自我状態としてPAとSAの二つを持つ。

日本人の生き方・人生脚本を人形で表すと、大人の自我状態を指標にした典型的な生き方として、図5に示すように、PAが強い生き方、SAが強い生き方、PAとSAのバランスのとれた生き方がある。

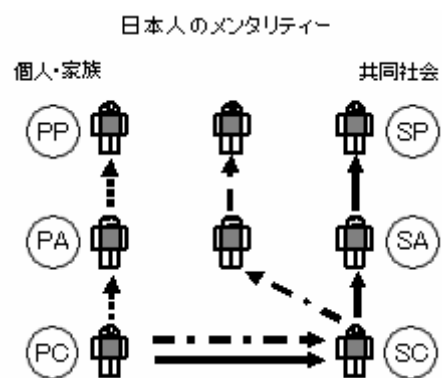


図5. 日本人の生き方のフレームワーク

(1) SAが強い生き方

社会に順応する生き方で、個人としての主張を抑える伝統的な生き方といえる。図6に示すように実線で表される建前の生き方と点線で示される本音の生き方が並存し、自我状態としてPAが明瞭でない。

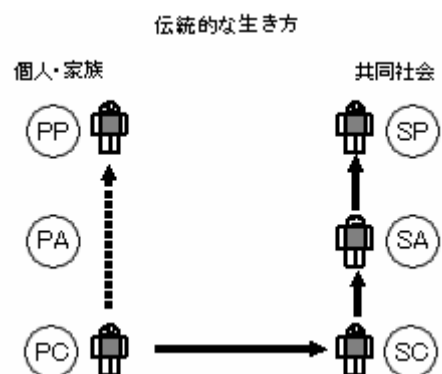


図6. SAが強い生き方

(2) PAが強い生き方

個人の自我状態PAを重視する生き方で、家族中心の生き方となる。図7のようにSC、SA、SPの自我状態

がなく、社会的規範に対する意識が低く、社会性を欠いた生き方となる。

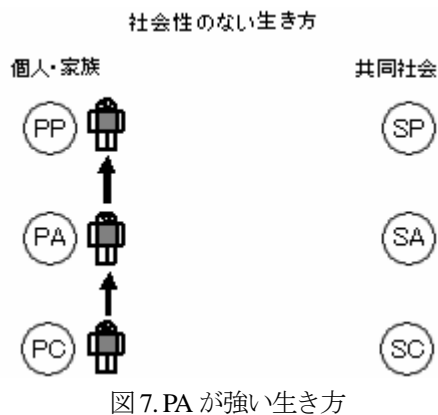


図7.PAが強い生き方

(3) PA と SA のバランスのとれた生き方

個人・家族のPCから出発し、SCとして社会規範を身につける。個人としての自我の発達がPAを生み出し、SAとのバランスある生き方が可能となり、更にPPとSPのバランスのとれた生き方もできる。

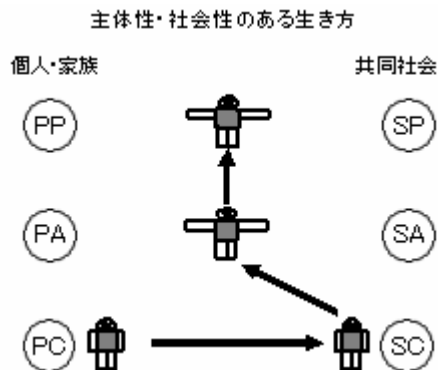


図8.PAとSAのバランスのとれた生き方

3.2. サッカー選手のメンタリティー

3.2.1. サッカー選手の自我状態の定義

サッカー選手の社会はチームであり、チームを軸として、子供、大人、親の自我状態を定義する。

- Team Parent (TP) : 親
- Team Adult (TA) : 大人
- Team Child (TC) : 子供

TPとして表現される親は、チームのボスである監督であり、TCとして表現される子供は、親である監督の

指示に従う選手である。

TAとして表現される大人は、チームの一員として、自分の責任を果たそうとする選手である。

3.2.2. 欧米人選手のメンタリティー

図4の欧米人の生き方のフレームワークで、個人の軸を選手、契約社会の軸をチームとすると、図9の欧米人選手のメンタリティーとなる。

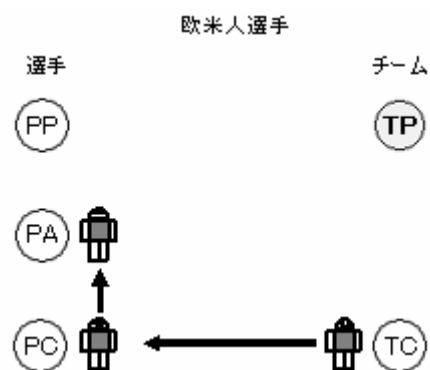


図9. 欧米人選手のメンタリティー

3.2.3. 日本人選手のメンタリティー

図5の日本人の生き方のフレームワークで、個人・家族の軸を選手、共同社会の軸をチームとすると、図10の日本人選手のメンタリティーとなる。

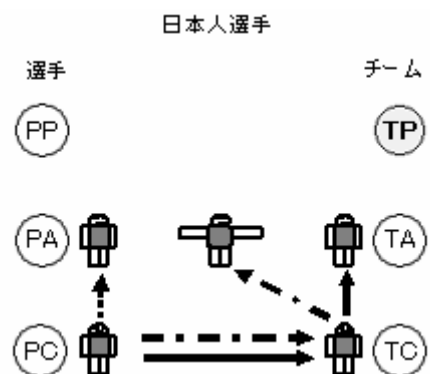


図10. 日本人選手のメンタリティー

(1) TAの強い選手

図11に示すように、TAの強い選手はチームに順応する選手で、個人としての自由なプレーを抑えてしまう伝統的な日本人選手といえる。

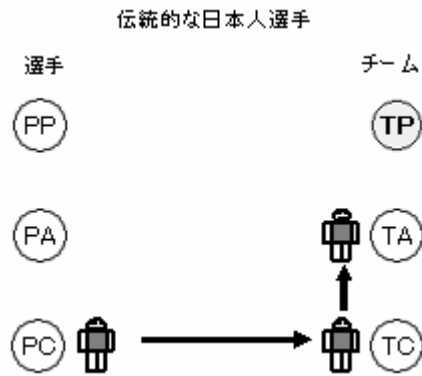


図 11. TA の強い選手

(2) PA の強い選手

図 12 に示すように、PA の強い選手は個人としての自由なプレーを好み、他の選手との連携プレーが不得意な選手といえる。

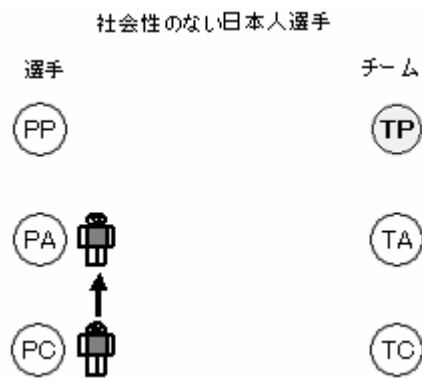


図 12. PA の強い選手

(1) PA と SA のバランスのとれた選手

図 13 に示す選手は、個人としての自発的なプレーもでき、他の選手との連携プレーも上手くできる。

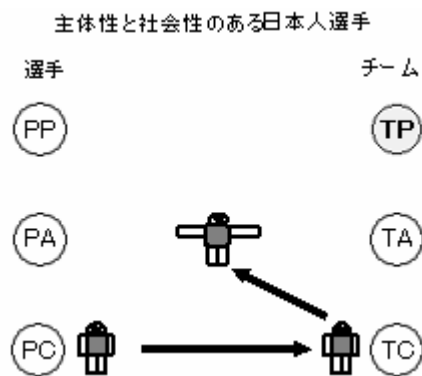


図 13. PA と SA のバランスのとれた選手

3.3 人間のメンタリティーの作出プロセス

3.3.1. アメリカ人の自我状態の作出プロセス

図 1 に示した自我状態を、図 2 に示したアメリカ人の生活曲線に合わせて配置すると、図 14 に示すアメリカ人の自我状態ができる。

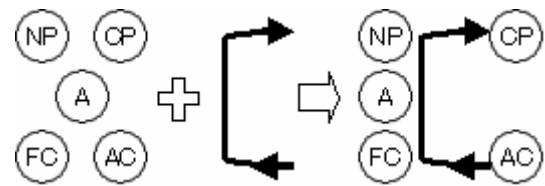


図 14. アメリカ人の自我状態の作出プロセス

3.3.2. 日本人の自我状態の作出プロセス

図 1 に示した自我状態を、図 2 に示した日本人の生活曲線に合わせて配置すると、図 15 に示す戦前の日本人の自我状態ができる。

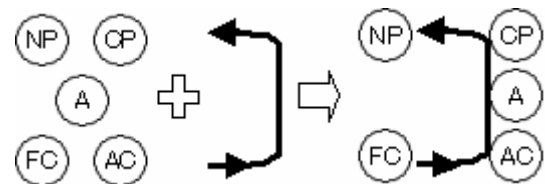


図 15. 日本人の自我状態の作出プロセス

3.3.3. アメリカ人と日本人の自我状態の違い

アメリカ人と日本人の自我状態をまとめ、比較したものが、図 16 である。

アメリカ人は、AC から出発し、大人の自我状態 A が自由の側に存在する。日本人は、FC から出発し、大人の自我状態 A が拘束の側に存在する。

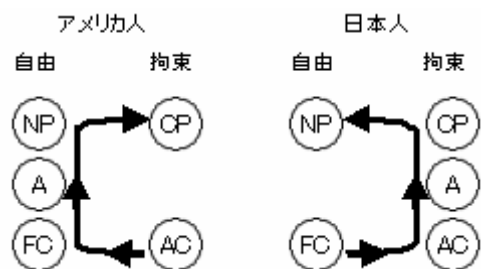


図 16. アメリカ人と日本人の自我状態の違い

3.4. 自我状態の違いの分析

アメリカ人と日本人の自我状態に違いが生まれる原因は、生活曲線の違いであり、それは人間が生活する社会の違いから生まれる。

生活曲線は自由と拘束を基準としているが、自由を求めるのは人間及び家族であり、その自由を規範等で拘束するものが社会である。

自由を個人・家族とし、拘束を社会として、自我状態を分析する。

3.4.1. 自我状態とキリスト教社会

キリスト教社会は、神と神の子（人間）からなる。

CP(Critical Parent)は父なる神であり、AC(Adapted Child)は神の子としての人間である。

CP(Critical Parent) → GP (父なる神)

AC(Adapted Child) → GC (神の子)

図14において、自由を個人に置き換え、拘束をキリスト教社会に置き換えて、自我状態を図式化すると、図17になる。



図17. キリスト教社会の自我状態

3.4.2. 自我状態と村社会

戦前の日本人の生活する社会は村社会である。

CP(Critical Parent)は村を治める村長や長老であり、AC(Adapted Child)は村で育てられる子供である。

CP(Critical Parent) → MP (長老)

AC(Adapted Child) → MC (村の子)

自由を家族で置き換え、拘束を村社会で置き換えると、図15の自我状態は図18になる。

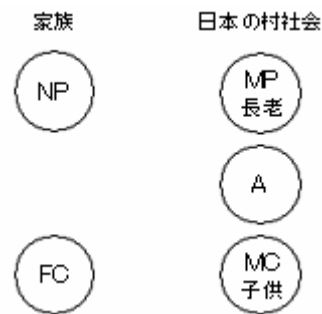


図18. 日本の村社会の自我状態

3.4.3. 民主主義と日本人の自我状態

戦後、日本は民主主義社会となり、個人の自我が意識されるようになってきた。

家族の軸は、家族と個人が並存する状態になった。

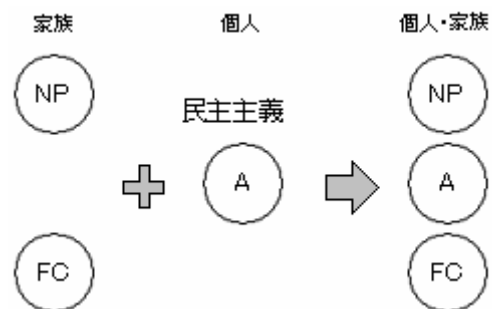


図19. 民主主義と日本人の自我状態

3.4.4. 戦後の日本人の自我状態

戦後の民主主義社会で、大人の自我状態が個人・家族の軸と村社会の軸に存在することになった。個人の自我状態の不明確さが主体性のない指示待ち人間を生み、村社会の意識が企業一家と言われる村社会を生み、大人の自我状態として会社人間が生まれた。



図20. 戦後の日本人の自我状態

3.4.5. 自我状態の図式の一般化

自我状態をパーソナル(Personal)な自我状態とソーシャル(Social)な自我状態として一般化する。

図 20 の自我状態の図式を、P 個人・家族(Personal)の軸と S 社会(Social)の軸で捉え直す。キリスト教社会を契約社会、村社会を共同社会とすると図 21 の自我状態ができてくる。



図 21. 欧米人と日本人の自我状態

3.4.6. 欧米人と日本人の幼児脚本

図 21 に示す欧米人と日本人の自我状態に、三つ子の魂である幼児脚本を重ね合わせたものが図 22 である。

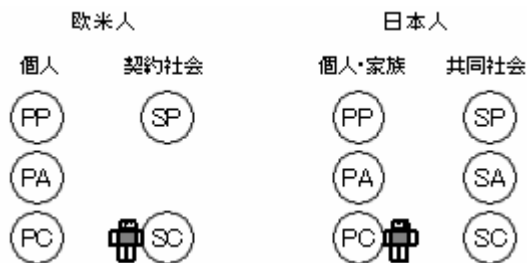


図 22. 欧米人と日本人の幼児脚本

3.5. サッカー選手のメンタリティーの作出

サッカー選手のメンタリティーのフレームワークを人間のメンタリティーから作出するプロセスは、3.2.2. 欧米人選手のメンタリティーと 3.2.3. 日本人選手のメンタリティーで既に説明してある。

4. 考察

4.1. 日本人選手の育成方法

日本のサッカーチームが試合で好成績を挙げた場合、その要因として選手の気持ちがまとまり、チーム一丸

となって戦ったことが上げられる。

一丸となったチームの選手は、大人の自我状態として PA と TA のバランスがとれている。PA の自我状態の基礎となるのは PC であり、TA の自我状態の基礎となるのは TC である。

4.1.1. TC の自我状態の育て方

日本人の幼児脚本は FC の自我状態にあり、自由と我儘が基本的な生き方である。TC の自我状態を育てるには、子供に対してチームがオールフォーワンの精神で対応し、サッカーの喜びを友達と共有させ、チームの規律に従う大切さを教えて、帰属意識を育てる。

4.1.2. TA の自我状態の育て方

TA の自我状態を育てるには、チームの目標を掲げ、選手全員が目標達成のためにワンフォーオールで協力しあうチームを作り上げることが大切である。

2011 年度全国高校総体サッカーで優勝した桐蔭学園高サッカー部監督山本富士雄氏の「勝ちながら育てなければならぬ」の言葉は、至言といえる。

4.1.3. PA の自我状態の育て方

選手が個人としての自覚を持ち、向上心が生まれると、チームに対する貢献意欲が増大する。

自分の誇りを大切にする気持ちは、最高のパフォーマンスを求めて、積極的なプレーを生み出すので、常に選手を励ますことが大切となる。

4.2. 日本人チームの特徴

日本のチームは、TP と TA と TC が存在する人間関係のチームである。

監督と選手は、TP と TC の関係で成り立つ縦の関係であり、選手は同僚意識 TA による横の関係がある。即ち、日本のチームは、縦と横の関係で成り立つ。

また、選手個人は PA として、チームに対する強い貢献意欲を持つことが認められる。

選手同士が PA と TA の気持ちで話し合い等を行うことにより、相互信頼の気持ちが確認でき、一体感が生まれると、日本人チームは好成績を残している。

4.3. 日本人チームの監督について

日本人チームの特徴は TA(Team Adult)であり、これを生かすことが監督に求められる。

外国人監督が、日本人選手の TA の特徴を理解しない場合、この特性を生かすことができないので、日本人チームの好成績は期待できないといえる。

日本人が日本人チームの監督を務める場合、TA の働きを妨げる過大な干渉は避ける必要がある。

なでしこジャパンの好成績は、選手の自発的活動から生まれている部分もあるといえる。

4.4. 欧米のチームの特徴

欧米のチームは契約で成り立つチームである。

チームでは TP である監督が絶対権力を持ち、選手は TC として監督の指示に従うことが求められる縦の関係である。

選手は1個人 PA としてチームと契約を結ぶことになり、選手同士は並列の関係である。

TA の存在しない欧米チームでは、チームの一体感が生まれにくく、チーム一丸となることは難しい。

4.5. 日本人選手の国際性について

欧米社会は契約社会であり、人の繋がりが基本となる日本の社会とは異なる社会であることを理解する必要がある。

欧米の監督は選手に対して、明確な要求を出し、それを実行し、結果を出すことを求める。

欧米人選手と同様に、強い PA を持った日本人選手は、欧米のチームでも活躍できると考えられる。

5. 結語

経済学の分野では、カール・マルクスが「資本論」で想定した人間は PC, PA, PP の自我意識を持つ人間であり、マックス・ウェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で想定した人間は PC, PA, PP に加え、キリスト教的な SC, SP の自我状態を持つヨーロッパの伝統的な人間といえる。

これに対し、日本人は SC, SA, SP の村社会の自我状態を持つので、生活の場として人間中心の共同社会を求める。伊丹敬之の以人为本主義は、日本人の特徴を生かす経済的思考の例であるといえる。

サッカーにおいても同様に、日本的サッカーとは、ヨーロッパのサッカーやラテンアメリカのサッカーの模倣ではなく、日本人のメンタリティーに適合し、日本人の特徴を生かすサッカーである必要がある。

日本人選手は PA と TA の自我状態を持っているので、日本のチームは人間の縦と横の関係で構成され、一体感のある強固な組織ができる。

また、日本人選手は TA の自我状態を持つので、チームワークに優れた働きがあり、連係プレーにおいて大きな優位性があるばかりでなく、自由の三つ子の魂は研究心と向上心を生み出すので、創造的なプレーを発揮する才能に恵まれているといえる。

選手の自主的・自発的な活動やプレーを推奨し、新しい戦術や高度な技術にチャレンジする選手の気持ちを砕くような指導方法はとるべきでないといえる。

さらに、欧米で開発されたメンタルトレーニング方法を取り入れる場合、欧米人と日本人のメンタリティーの違いを理解しておくことも重要である。

人生脚本は人間の心の中に積み上げられていくものであり、サッカー選手がより良い人生脚本を作り上げながらサッカー人生を送れるよう、本研究がサッカー指導の現場で、選手育成のための一助になることを願っている。

文献

ルース・ベネディクト著、長谷川松治訳 1967 菊と刀 292-293 社会思想社

杉田峰康・中村和子 1984 わかりやすい交流分析 3-5 チーム医療

杉田峰康・国谷誠朗 1988 脚本分析 66-77 チーム医療

中野敬三 2010 「菊と刀」の視点で見る日本人選手のメンタリティー 日本フットボール学会 第8回 抄録集 52